

2015. 10. 31
育英学院同窓会
副会長
近松 秀明

2015年10月2日～7日 世界サレジオ同窓会会議（速報）

第5回 サレジオ同窓会代表者会議 2015 (WORLD ASSEMBLY OF PAST PUPILS OF DON BOSCO) に、当同窓会より、最近発足した、サレジオ同窓会日本連合会の一員として参加することとなり渡欧した。

サレジオ同窓会代表者会議は、6年毎に開催され、第4回は、2010年なので、本来、第5回は、2016年であるがドン・ボスコ生誕200周年にあたり、変則的であるが本年、開催することで、記念すべき年に各国代表が一堂に会する機会となるというのが理由の一つの様である。参加者はおよそ200名で当初26ヶ国であったが、後半でベトナムなどが参加していた。サレジオ同窓会日本連合としては、以下の通り 4 名が派遣された形となった。

- ・鈴木 正夫 神父 顧問 (サレジオ小中学校前校長) カトリック大和教会主任司祭
聖トマス学園スミレ幼稚園園長
- ・矢本 浩教 理事 (大阪星光学院同窓会 常任理事)
- ・立石 光洋 事務局長 (サレジオ学院同窓会常任幹事) サレジオ修道会日本管区広報担当
- ・近松 秀明 理事 (育英学院同窓会 副会長)

今回の大きな目的は、全世界を代表する同窓会の会長及び執行委員の選挙による選出と会則の改正が主体であったが、バチカン サンピエトロ大聖堂における、サレジオ同窓生としての、早朝ミサ、及び参加各国の交流を深めるため、交流のタベなど充実した企画が計画されていた。同窓会、サレジオ家族全体にとって良い刺激となった会議であった。

日程は、2015年10月3日から9日の設定で、前半の10月3日から6日がローマでの会議が設定されており、後半10月6日から9日はトリノ巡礼となっていたが、業務の関係もあり、ローマ会議のみ参加の行程で対応させて戴くこととし、10月2日から7日の行程で対応させていただいた。以下概要を報告する。

1. 行程等

1) 第1日目 10月2日 (金) : 移動、会食会

【移動】

羽田国際空港 00:50 → NH203 → フランクフルト国際空港 06:00

フランクフルト国際空港 07:40 → NH6135 → ローマ・フィウミチーノ国際空港 (レオナルド・ダビンチ空港) 09:25 → 送迎タクシー サレジアヌム11:00

【会食会】 2階 レストラン ひまわり
20:00～22:00 (近松のみ)

2) 第2日目 10月3日 (土) : 本会議、文化交流会

(鈴木神父、立石氏と ミラノからの矢本氏と当該日より合流)

【レジストレーション】 2階 ロビー会議室

10:00～11:00

【日本連合ブリーフィング】 2階 ロビー

15:00～16:00 (鈴木神父、立石氏、矢本氏、近松)

【本会議1】

17:00～20:00 3階 会議場

会議規約承認、投票権の確認他

【会食会】 2階 レストラン ひまわり

20:00～21:00

【夕刻の祈り】 2階 レストラン ひまわり

21:00～21:30 (世界連合顧問ラミレス神父)

【文化交流会】 3階 大会議室

21:30～23:00 各国同窓会連合会のテーブルブースでの紹介と催事

配布先

林 会長、小島 校長
高橋事務局長、木戸 理事

2015.10.09 作成 (A)

2015.10.12 一部修正B

2015.10.17 一部修正 C

2015.10.18ローマ空港議事等追補 D

3) 第3日目 10月4日(日) : 本会議 : 市内見学会

【ミサ】2階 聖堂

07:00~08:00

【本会議2】3階会議場

09:05~19:00 各国同窓会の報告

(09:05~10:30 インド、ブラジルなど10ヶ国)

(10:55~12:58 フランス、日本、イタリアなど10ヶ国)

(14:50~15:37 タイ、東チモール、インド)

15:38~16:20 選挙管理委員の選出

16:20~16:30 選挙管理委員の発表

16:30~19:00 会則の改定と承認

【会食会】2階レストラン ひまわり

19:00~20:45

【夕刻の祈り】2階レストラン ひまわり

20:45~21:15

【ローマ市内見学】貸切バスでの夜間観光、コロッセオ、コンスタンティヌス帝の凱旋門など

21:15~23:45

4) 第4日目 10月5日(月) : 移動、バチカンでのミサ、本会議

【移動】

サレジアヌム06:30→貸切バス→08:00バチカン

【ミサ】サンピエトロ寺院 聖ペトロ大聖堂

08:00~09:30 (エンリコ・ダルコヴォロ司教)

【移動】

バチカン09:30→貸切バス→11:00サレジアヌム

【本会議3】3階会議場

11:00~20:00 (投票、開票、総長挨拶)

(11:00~11:30 新リーダーの選出)

(11:30~15:30 会長候補の演説と投票)

(15:30~16:00 フェルナンデス総長の講評)

(16:00~17:15 会則の改定と承認)

(17:50~19:40 フェルナンデス総長挨拶、新会長の挨拶、地域代表の選出他)

【会食会】2階レストラン ひまわり

20:00~21:00

【夕刻の祈り】3階会議場

21:00~21:10

【ボナノッテ(晩の短い講話)】3階会議場

21:10~22:00 (フェルナンデス総長)

【日本連合ブリーフィング】

22:00~23:00 2階 ロビー (出席者 鈴木神父、立石氏、矢本氏、近松)

5) 第5日目 10月6日(火) : ラップアップと移動

矢本氏は諸般のミサの後、帰国

【ミサ】2階 聖堂

07:00~07:45

【本会議3】3階会議場

08:45~11:00 (会則の改定と承認)

11:00~11:20 (シュナイダーエレクトリックに勤務する同窓生によるプレゼンテーション)

11:20~12:40 (今後の課題と対応に関する、語学圏毎のディスカッション

→日本連合は英語圏グループに参加して意見交換)

12:45~13:00 (新会長所信表明演説、証書授与)

【移動】

ローマ・フィウミチーノ国際空港 (レオナルド・ダビンチ空港) 18:15 → NH6094 →

→ ミュンヘン国際空港20:20 (10分早着)

ミュンヘン国際空港21:25 → NH218 →

第6日目 10月7日(水) : 移動

→羽田国際空港 15:50

2. 概要等

2.1 会議対応報告事項 (特記事項のみ)

1) 事務局報告

会長選挙投票にかかわる各国の有する投票権の確認、予算の執行状況、活動における反省点などの報告があった。ファイナンスにかかわるペーパーは配布されず口頭報告のみであった。

投票権に関しては、サレジオ会の管区と当該管区と同窓会が連携する目的で、基本的に、管区の数に準ずるため、インドは14票の投票権があるとのことで、若干不公平感があるが従来の運用の延長上でありいたしかたない。日本は1票である。

結果として、アジア、オセアニア地区で23票、欧州で31票、その他29票、合計83票となる旨の発表があったが、投票日当日の再確認では有効投票数は85票ということになった。



写真1: 会議開始前の会議場の様子

2) 各国同窓会連合報告

26カ国の報告となるが、地区代表の報告もあるので実際はこの数より多くなる。当初2部構成で計画されていたが結局3部構成となった。

1部、2部では10名、3部では3名の合計24名の報告があった。インドなどは1ヶ国で、3名の報告があったほか、棄権もあった様で最終的には以下の国々になった。

【インド、アルゼンチン、ブラジル、チリ、香港、コロンビア、コスタリカ、クロアチア、エクアドル、フランス、日本、イタリア、マルタ、パラグアイ、ポルトガル、プエルトリコ、スロバキア、スペイン、タイ、東チモール】

初めにアジア代表で、インドのグプタ氏からアジア地区における近況の報告があり、アジア地区は、インド、タイ、フィリピンと非常に大きなエリアとなっており経済的に発展をして地域と発展からの乖離のある、ラオス、カンボジア地域を含めた地域がある。当該の地域への対応は重要であり、ドン・ボスコの意思を引き継いだ活動を実施しており、支援願いたい旨の趣旨で演説されていた。しかしながら日本に関しては全く触れられなかったのが残念であった。

日本は、2部のフランスの次の2番目で、立石氏がメインスピーカとなり、エンディングで矢本氏が思いをアナウンスした。時間は若干超過し13分程度となった。時間は最大7分での配分になっている様であるが、情念的な配慮が



写真2:

フランチェスコ・ムチエオ氏と

(10月3日)

ある様で、主催国のイタリアの発表では、15分程度まえ延長されていたので時間通りとっていいだろう。事前に準備した、“サレジアン法被”を壇上で着用する演出と、歌舞伎さながらの、両氏のイントロに会議場内はとてなごやかな雰囲気となった。内容は、サレジオ会の日本布教の経緯歴史、教育事業にかかわる各校の紹介、日本連合同窓会の設立と活動内容などを手短かにまとめたスライドを使用し説明し、エンディングでは、東日本大震災からの復興過程にある日本が2020年にはオリンピックを迎えるまでに回復過程にあり支援を願いたい旨の趣旨でプレゼンを終了した。



写真3：立石氏と矢本氏の
プレゼンの様子（10月3日）



写真4：サレジオ同窓会日本連合（10月4日）
左より 立石氏、矢本氏、鈴木神父、近松

3) 会長選挙

13ヶ国が立候補したこともあり、プレゼンを拝聴し、投票者を選定するという事は、かなり難しい対応であった。結果的には棄権（欠席？）もあり、10ヶ国からの選定となった。休憩時間などにおいてロビー活動が活発におこなわれていた。当該の投票については、基本1管区あたり1票の割り当てであり、インドなどは14票も権利があるということで、個人的には奇妙なものという印象であった。

プレゼンはオーラルがほとんどであり、インド代表などは、英語で力強い激しいプレゼンであるも、良くわからなかった。一方で、スロバキアのプレゼンは、スライドを駆使し、非常にわかりやすい英語のプレゼンであったこともあり、ロビー活動でコンタクトしてきた、ブラジルの候補と優位が逆転してしまった。投票の確認で、なぜか日本は2票あるとのアナウンスがあったことから、日本連合内の打ち合わせで分割してブラジルとスロバキアとすることで合意を得て臨んだが、投票

時点の確認で再度日本は1票というアナウンスをうけ独自の判断で絞り込んだ。

開票の結果、世界連合の会長は、2期目を満了したフランチェスコ・ムチェオ氏（イタリア）にかわり、新しくミハイル・ホルト（Hort Michal）氏（スロバキア、37歳）が新会長の任を拝命することとなった。



写真5：フェルナンデス総長と新会長を囲んで（10月5日）
左より 近松、矢本氏、ミハイル・ホルト氏
フェルナンデス会長、鈴木神父、立石氏



写真6：惜しくも破れたブラジルのエドワード氏と夫人

10月3日の交流会の夕べにて

左より エドワード夫人、矢本氏、エドワード氏、近松

4) 役員選挙

役員を選出については、個人的には、新会長以外の候補者の得票順に決めてしまえば良いと思うところであるが、これも再度のプレゼン拝聴と投票となっていた。結果は得票順に役員選出と同様になった。

なおこの際、欧州、米国（北米、中米、南米）とアジア、オセアニアの3区分となっており、アジア、オセアニアはインドのグプタ氏だけのため、同氏が無投票で選出された。

5) 規約の改正と承認

今回は、大幅な改正があったこともあり、承認作業にかなりの時間を要した。前記の会長投票もふくめ、各国の代表1名が当該の対応することになっており、議場の最前列の投票者席に、当該の各国代表者が着席し対応するというものであった。初回に承認されたものを次の回に再度内容を確認するという作業もあり、挙手による合意確認を章ごとに実施するなど、かなり忍耐が必要な対応となった。

当該の対応では、インド代表が特定の場面で、苦情提示などするため、議事の進行面では、ネガティブなものと思われがちであるが、代表者としての主張をするという視点では見習うこともある。とくに、会長の選出の規約改定においては、アジアグループとしては、1ヶ国1票で対応することでコンセンサスを得て、タイ代表も含め了解していたにもかかわらず、投票の直前で、インドも含め、別案である、従来の管区の数での配分主張に合意をもとめられた。従来の対応が公平でないので合意できない旨を伝え、日本としては、1ヶ国1票に投票した。なおこの議論に関しては、国ごとに最大5票までとする方向になった様であるが、最終的にはローマ本部からの議事録又は結論を待ちたい。



写真7 規約改正審議投票の様子（10月5日）

2.2 文化交流の夕べ

第1日目の会議終了後に、各国のブースを設け、活動状況の一環の紹介を行った。国によっては、特産の酒、スナック類をふるまうなどしており、当該の対応のブースは人気があった。日本連合はコミックのコラッジョ（ほ日本語版）を展示し、ドンバスコバッチなどを配布するとともに、全員法被を着用（写真6参照）して存在感をアピールした。副総長のチェレダ神父からも「日本が会の雰囲気盛り上げてくれている」と称賛をいただいたと鈴木神父から報告があったほか、ムチエオ会長ほか要職の方々にお土産の法被を渡し大変喜ばれた。

コミックのコラッジョについては、翻訳はいつできるのかなどの質問が集中した。また、鈴木神父が準備した扇子も人気で、当日すべて配布完了し、催事の終了間際に扇子がほしいという希望者も多かった。

コスタリカなどの、南米、中米代表は踊りなど参加者の注目をひく活動で自国をアピールしており、祖国を大切にするという気持ちには敬意を払いたい。



写真8：
交流会の夕べにて踊りを披露する中米コスタリカの代表（10月3日）



写真9：
交流会の夕べにてブラジル代表と懇談するチェレダ副総長（10月3日）

2.3 日本に対する期待など

【東チモール】

参加国の中で最大の、50名の代表団を派遣している、親日国家であり、スロイテル神父が当初の活動に大きく寄与したことから、サレジオ高専のことを知っている人もいた。来年のアジア、オセアニア大会の開催国であることから、日本からの代表がくることに大変期待している様で、ユニフォームであるジャケットを頂いた。来年訪問する方はぜひ当該のジャケットを催しの前後など着用いただくと良いと感じた次第である。

【エクアドル】

4日目の会食会において、鈴木神父とエクアドルの Ing. Milton Leon M (ミルトンレーモン) 氏とテーブルを囲んだ際に、エクアドルの工業学校とサレジオ高専の間で、ぜひ技術教育交流を実現したいとの話が展開した。

回答にいささか躊躇したが、帰国後に学校側に伝える旨を説明した。今後、展開する上では、サレジオ高専の学科を具体的に説明し、技術教育交流ができる学科があるかというところから始めることになると思う。

今回の渡欧では学校のパンフレット(英文の学校案内も必要)などはまったく持参していれば、対応の可能性などをその場で提示し可能性の有無を判断できたと思われるが、材料不足であり残念であった。

今後は、別途学校側と打ち合わせの上、まずは同窓会から前記の対応をし、その後、学校側への展開の順序になるかと。

2.4 シュナイダーエレクトリック

フランスの電機メーカ。1836年、Adolphe Schneider (アドルフ・シュナイダー) (1802—1845) と Eugene Schneider (ユージェーヌ・シュナイダー) (1805—1875) の兄弟が、1782年以来続いていたフランス中部ル・クルーゾの製鉄所を買収したことに起源をもつ電機メーカである。1838年、機械工場を設置し、国産第一号の蒸気機関車を製作した。また同年にはシュナイダー社 Schneider & Cie. を創設し、シャロンに造船所を建設した。

1850年代からは鉄製橋梁(きょうりょう)の製作も手がけた。1870年代以降、大砲、装甲鋼板などの兵器生産に進出し、19世紀末には重電機分野を新たに付け加えた。1900年、電気機関車の生産を開始した歴史を有す。同社はサレジオ会関係の電気設備関連も含め関係が深い様である。

2.5 日本連合会合報告

初日(3日)のブリーフィングでは、各国の発表に関係した、演出方、文化交流のタベの進め方などを協議した。また、ミラノ博の件に関しても、参加した大阪星光の矢本氏から報告があった。

ミラノ博は日本では一部の報道しかないが、かなり盛大に開催されている様で、別称 食の万博: いわゆる地方博覧であるが、ドンボスコ館がオープンしているということでイタリアならではの対応がされていると感じた。

今回、大阪星光学院の矢本氏が10月2日に同館のブースでコミックを主体にプレゼンを実施し、好評であったとの報告があった。立石氏によると、当該の博覧会に主催者側から、サレジオ高専に、ソーラーカーなど環境技術に関する展示を約2週間、参加(費用は主催者負担)してほしいとの展示対応協力の呼びかけがあったにもかかわらず、サレジオ高専はその招待を断つたらしい。今回の矢本氏のプレゼンは、6月頃から、矢本氏の側から、サレジオ会本部広報担当のエフレム氏に企画を提案し、直前での調整にもかかわらず、エフレム氏と主催者の寛大な協力により実現したとのことであった。

かなり大がかりの博覧会であったことから、地元報道関係の取材もあった様で、日本館も近くにオープンしていたことから、もしサレジオ高専が対応していたら、かなりインパクトのあるものとなり、広報効果も絶大であったのではないかとのご意見を戴いた。

矢本氏は、10月6日のミサ出席後、帰国の段取りとなっていたことから、5日の会食後に再度ロビーに参集し、一連の対応の反省、今後の課題、それぞれの感想などの意見交換を行った。感想としては、サレジオ会のスケールとドン・ボスコそのものブランド力が日本以外ではかなり浸透していること。また信仰が生活の中にとりこまれていることなどが率直な感想として提示された。さらに、卒業後社会人となった後の帰属意識の高さと、同窓会にたいする関心の高さなどが話題となった。日本の場合は、多くは高校課程修了後に、サレジオとはあまり関係ない進路で進学することが多いので社会人となった後の帰属意識の持続性が難しい局面があると思われた。

前記に関連し、エントランスに掲示されている、関連の施設などが書き込まれた世界地図を各校のロビーなどに展開するのも一案である旨を、当方より提案したところ、各位の賛同があった。

2.6 ラップアップ

最終日には、世界サレジオとしての今後の課題と対応に関する、語学圏毎のディスカッションがあり、日本連合は英語圏グループに参加して意見交換した。（矢本氏は帰国のため、3名で参加）課題としては、通訳の対応、卒業生の進路トレースなどが提示された。当方からは、6年毎の開催はスパンが長いいため3年毎にミニセッションを企画してはどうかと提案し、賛同を得た。また、今回、不参加となっている国の事情などを聞いたところ、資金的な問題の他、本部と各国連合との連絡不足による問題（WEB、メーリングリスト等連絡手段の未整備）が大きい様であった。



写真10： 10月6日 関係者集合写真 ロビー前階段にて

3. 感想とまとめ

今回、会議とこれらの施設利用と関係者との交流を通してサレジオ修道会の大きさと、ドン・ボスコの理想を追求した教育関連事業の底の深さを、身をもって体験することができたことは大きな成果であった。

また、同窓会、学校含め、サレジオ修道会の活動、世界同窓会の広範な姉妹校とのつながりを在学中の学生、父母にもアナウンスするとともに、一部から検討要請のあったサレジオ高専との技術教育交流等も、前広に対応する必要があると考える。

次回は6年後（場合によっては、3年後にミニセッション開催の可能性もある。）であるが、全体会議とは別に個別の情報連絡体制などの検討も視野にいれた、日本連合としての同窓会活動も必要と思われるが、まずは、現在立ち上げた、サレジオ同窓会日本連合会の活動をしっかりとしたものにしていきたいと感じた。

4. その他

1) サレジオ修道会

サレジオ修道会は、ローマ法王（教会では教皇）のバチカンのもとで、イエズス修道会、フランシスコ修道会とともに活動する3大修道会の一つである。（現在の教皇も若き頃サレジオの生徒だったとのこと）

今回の会場は、そのサレジオ修道会本部にある、サレジヌムと呼称される施設で開催された。サレジオ修道会本部は、ローマ空港と市内のおよそ中間地点付近、ローマ郊外に位置し、サレジヌムには、300名程度収容可能な大会議場と複数の会議室、聖堂などが配置されており、また参加者全員の宿泊も可能な施設となっている。

建物の雰囲気はなぜか、茶色のブロックを基調とした建物のためか、最近開園された、町田のサレジオ幼稚園と類似しており親近感があった。



写真11： 施設全景 （10月2日）

エントランスには、関連の施設などが書き込まれた世界地図が掲示されていた。今回の会議とこれらの施設利用と関係者との交流を通してサレジオ修道会の大きさと、ドン・ボスコの理想を追求した教育関連事業の底の深さを、身をもって体験することができたことも大きな成果であった。

地図には “132 nations, 90 provinces, 1952 house, 15,373 SDB (10,393 priests, 1,824 brothers, 2,676 students, 480 novices ” との記載があった。



写真12： 入り口付近のドン・ボスコ像 （10月2日）

2) 会議時同時通訳について

イタリア語が公用となっているので、同時通訳として、スペイン語、ポルトガル語、英語が準備されていたが、英語の同時通訳がプアーであり、体調がわるいのか、状況が良いときだけ少しだけ通訳すると、ヘッドホンからは、ため息？が聞こえてくるだけで、英語以外のプレゼン内容はほとんど理解できなかった。

（ときどき Yes, Thank you, などが体調不良？のときに聞こえるという状況で、例えば

We should provide educational good condition.

Ha, Haa, Haa yes, Ha, Ha then issued program Ha, Haa yes Thank you

の様な感じの同時通訳がほぼ一日中続く状況であった。インド代表などがクレームを提示すると、時々人が代わりこれで大丈夫と思うとすぐもとにもどってしまう。）本件に関しては、最終日の英語圏ミーティングでも話題となり改善点として提示される予定

3) 会食会について

第1日目の会食会では、日本連合からの参加は下名のみで、珍しかった様で、イタリア関係者のテーブルに招かれ、チェレダ副総長と会長フランシスコ・ムチエオ氏とお話することができた他、別のテーブルでは、東チモール、インド関係者との懇談ができた。インド関係者は新日家があつまっており、さまざまな話題に展開があり大変に面白かった。とくに、第2次世界大戦において、日本が連合国と戦い、インドの独立に大きく寄与したことに大変感謝しているとのことであった。開催前日のため参加者はすくないがそれでも、60人前後がそれぞれのテーブルを囲み今回の会合を含め意見交換などを行っていた。

第2日目以降は、日本連合4名で参加し、前日と同様に各国の参加者と意見交換が行えた。

(その後、フランチェスコ・ムチエオ氏にロビー、通路などで会う都度、いつもそばに来てくれて握手をしていただけるといふ、状態になった。)



写真13： フェルナンデス総長と
(10月6日の昼食で)



写真14： ブラジル代表団と (10月2日)



写真15： 東チモールマルカス氏と (10月2日)

4) サンピエトロ大聖堂について

①□ドンボスコ像

聖ペトロ聖堂のエントランス付近の支柱に設置されているが、聖ペトロ像の上にドン・ボスコの良き理解者 恩人である、ピオ9世の絵画がありその上にドン・ボスコ像がある。立石氏によれば、ドン・ボスコは後世に聖人となった方にもかかわらずこのような場所に配置されていることは大変に興味深いものがあるとのことであった。



写真16： バチカン正面で (10月4日)



ドン・ボスコ

ピオ9世
聖ペトロ

写真17： ドン・ボスコ像 (10月4日)

②サンピエトロ広場のプロジェクトスクリーン

法王に謁見に集合した人々に対する設備として4箇所を設置されているが、全て“Panasonic”であり日本製品が評価されている。



写真18： パナソニック製スクリーン



写真19： パナソニックのロゴがある

5) 移動に関わる関係報告

①羽田空港

往路便は、羽田からの全日空でフランクフルトにてルフトハンザ航空に乗換へローマに行く経路とした。羽田空港は、国際線ターミナルが整備され、東京モノレールおよび京浜急行の2路線からの直接アクセスができるようになってからは、格段に利便性が向上しているが、埼玉東部方面からのアクセス

となると、通勤、通学時間帯では、専用特急列車アクセスがないので、成田空港よりも利用しづらいが、早朝、深夜時間帯付近では大宮からのリムジンバスが定期運行しているので、リムジンバス利用であればさほどでもない。復路はローマからルフトハンザでミュンヘンにての全日空に乗り継ぎ羽田着である。

②フランクフルト空港

フランクフルト空港は、ドイツ国内の最大の空港であり、極めて重要な世界の航空交通のハブ空港として位置付けられている。最近は乗り継ぎの際の検査が以前にもまして厳格になっており、最新の検査機器である3次元ボディチェックが導入されたことで、衣類に携行しているものはすべて別コンテナに移すよう要請される。

ただ関係の検査職員を充実させ、検査コンテナの搬送なども系統的に改善されているので、ドバイ、トルコ、カタールなどの類似レベル（検査機器は劣るが）の検査を実施していることと比較するとスムーズな流れである。

③ローマ空港

ローマ空港は、イタリアの首都ローマの中心地にある、歴史地区から南西へ約35kmのフィミチーノ市にあり、正式名称は“フィミチーノ空港 (Rome Leonardo da Vinci International Airport)”である。

ターミナルビルは1から3まであり、連絡用のムービングウォークなどはなくやや不便であるが、全体としてはまとまりがあるデザインとなっている。ターミナル3は工事中であり、帰国の際はバスラウンジからの搭乗となるため、時間に余裕が必要である。ターミナル3にはサテライトがあり、サテライトと本館の間には、APMが運行されていた。

ターミナルロビーには、ダビンチ空港であることを主張するモニュメント（写真20）が設置されていた。これは、1485年頃にダビンチが描いた“ウィトルウィウスの人体図”（現在ベネツィアのアカデミア美術館に収蔵されているがあまりにも有名な人体図）を立体モデルにしたもので、ダビンチに対するイタリア人の尊敬の念が感じられる。



写真20： ダビンチ空港であることを主張するモニュメント

市内まではレオナルドエクスプレスで約30分、料金は14EURと格安である。レオナルドエクスプレスは低床駅用として設計されているため、ドア開口部と客席の間に段差が2か所ありバリアフリー対応としてはあまり良い設計ではないが、プラットホームの特殊性からいたしかたないものとなっている。車体配色、客室内デザインは非常に洗練された印象であった。空港の手前の高架区間の架線中もデザイン的に駅部の構造フォルムを延長した形であり、塗装もクリーム色となっており、架線集電による空間の煩雑さをデザインで打ち消しており洗練されていた。日本の首都圏の架線柱もこのくらいの配慮をしてもらいたいものだった。



写真21：レオナルドエクスプレス
ローマ空港駅にて（10月2日）

駅部の架線柱（屋外の高架区間も同様）

ドア部は2段さがっている



写真22：レオナルドエクスプレス車内（10月2日）



写真23：レオナルドエクスプレス連結面
ローマ空港駅にて（10月2日）ダンパー

レオナルドエクスプレスは最近までは、機関車牽引で、客車内の配色も暗かった様だが、電車化されデザインも含め良くなっている。連接車両となっている他、車高がダブルデッカー並の高さとなっていることから、車両間は制振用のダンパーで連結されているのが特徴的であった。

（写真23）

④ミュンヘン空港

帰路は、ミュンヘン空港での乗り継ぎとなったが、ここでは、EU域内での乗り継ぎ扱いとなり、出国審査のみで手荷物検査がないため便利かつ円滑である。ミュンヘン空港は、ドイツ南部のバイエルン州ミュンヘン郊外の不ライジング近くに位置する国際空港で、ルフトハンザとスターアライアンスのハブ空港でもある。なおドイツ人は、Mを発音せずに、“ユニック”と呼ぶ人が多い。